

＜書を持って町へ出よう＞

カイコから何ができるのか？

－中国浙江省海寧市雲竜村

中奇生物薬業訪問記－

倪卉

2005年7月26日の早朝に、海寧市に到着した。事前に連絡した海寧市糸綢公司の曹主任が出迎えてくれた。午前中には海寧市の最も古い製糸工場の中糸三廠に製糸状況や生糸相場などの話を聞きにいった。

その真夏日の午後は、曹主任の案内で雲竜村へ、養蚕農民と話すことにした。海寧市から車で約30分走ると、道両側はすっかりと田舎の田園風景に変わってしまった。

高速道路からおりて、畑の真ん中、車一台しか通れない細道に沿って更に進むと、ようやく村の紅い瓦と灰色の瓦が葺いてある白い壁の小さい建物が見えてきた。村に入ると、どんな家でも一階の真ん中に大きな木の門がある。門は開いたままだった。たまたま門の脇に編み仕事をしている民婦がいた。

想像よりも小さい村だったが、色んな様式の民家がある。一階建てでもあれば、四階建てもあった。古くて土壁や紅いレンガの壁で、黒っぽい木の柱が見えるものもあれば、新しくて意外と現代的な白い陶器の壁で灰色のコンクリート柱が目立つものもある。

民家の列の奥に進むと、道の脇に小川が流れている。兩岸の深い雑草の中には、何本もの桑の木が立っている。

一人の農婦が出迎えに来てくれた。「お待ちしましたわ、こちらへどうぞ！」と南方なまりながら、私たち一行を目の前の白い壁の民家へと案内した。

一階は天井の高く窓のない部屋であり、奥の生活スペースへはその玄関を通らなければならない。室内には、ご主人と二人の娘が待っている。夫婦二人は40歳代であり、娘二人は20歳未満のようだ。私たちは玄関の真ん中に置かれていた四方のテーブルを囲いながら座った。

雲竜村に来る前に、曹主任は雲竜村の最も有名な養蚕人の金さんから話していただくと言ってくれたので、正面に座っているご主人は金さんじゃないかと思って私は「こんにちは。北京からの学生です。今回突然を邪魔してすみません。金さんですね。」と話を始めようとしていたが、「いいえ、いいえ、私は金先生じゃないよ。」とご主人が笑っていた。「北京からきたって、ようこそ雲竜村へ。金先生はちょっと用事があって、すぐくるよ。うちも蚕を飼っているよ。よく金先生の指導を頂

いているね。お陰で、毎年儲けているよ…。」とご主人の話が続いていた。そのとき、娘達はお茶を持ってきてくれた。「今年の新茶ですよ、北京にはないかも、どうぞ。」と娘が微笑んでいた。

海寧市に来てからどこに行っても、暖かい緑茶一杯をいただける。ここの人々の習慣は直接にお茶を透明なガラスのカップにいれて飲むのである。なぜなら、一本一本しっかりとガラスの底に立っている茶葉を楽しむことができるのだから。海寧は、遙か昔から養蚕とお茶の栽培を営んできたのである。何千年もの間、カイコと茶の文化が盛んで、どちらでも、海寧になくはない伝統である。

金さんが来る前に、このお家の養蚕状況も聞いてみようと思って、私は聞き始めた。

「養蚕は長いのですか。」

「ええ、お爺さんの、お爺さんのときからだよ。」

「長いですね。最近はどうですか、収入はいいですか。」

「そうね、最近繭価はよく変わるけど、でも、うちは養蚕以外にはやらないから。この村の唯一の現金収入は養蚕だよ。ほら見てね、醤油や砂糖を買う金から、娘の教育費、この屋敷を立てる金まで、全部養蚕の収入だよ…。」と言いながら、部屋中の品々を指していたご主人の顔には、自慢の表情が浮かび上がっていた。

「養蚕以外にはやってないですか、例えば、家禽類など～」私は探るように尋ねてみた。

「先祖代々養蚕をやって来たから、私たちもやらないとね～だから養蚕は忙しくて、他に飼う暇がないし、必要もない。食べる鴨なら、庭で、何羽か飼っているよ。」

「村のみんなも昔から養蚕やっているのですか。」

「そうですよ、この村、みんな蚕を飼っているね。しかし、最近、飼っている量はだんだん減っている気がするけどね…。」

そのとき、外から、50歳代半ばで皮膚が黒く日焼けしているおじさんが「ごめん、ごめん、遅くなった」と言いながら、玄関に入ってきた。

曹主任は「こちらは金さんだよ」と紹介してくれた。私は慌てて、「金先生、初めまして。今日のご指導のほど、よろしくお願いします。」と挨拶をした。

「よくきてくれました。ようこそ。指導までとはいえないが、知っていることだけ、全部言ってあげるよ…。」

すると、金先生は熱く語ってくれた。桑苗の選び方から、カイコの飼育の注意や、農薬や消毒薬の使用方法や、消毒剤の値段やブランドの区別や、繭収烘站の行き方や、指導站の指導講座の様子や、指導員たちの人事の異動までも話してくれた。なるほど、金さん

は村民たちに「先生」と呼ばれている。金さんは村民全員の養蚕の世話をしているので、全村の養蚕の状況もよく知っているようだ。こうして、あっという間に、2,3時間も過ぎてしまった。

準備した質問も終わるところで、私は養蚕の道具や蚕室などを見たいとお願いしてみた。そして、金さんとご主人は私たちを家の三階まで案内してくれた。三階は全体的に養蚕室になっている。真ん中二本の柱が立っている一つの広い部屋になっている。ドアと階段のある一面以外、三面壁に窓があいている。ご主人の話によると、家を建てる時に、三階を養蚕室として設計し、換気をよくするため、わざと沢山の窓を開けていたそうだ。夏には養蚕を行わないため、そのときは空き部屋だった。地面には竹簾など養蚕の道具がきれいに並んでいる。この地域で使われている稲草蓆（藁を作らせるための容器）を作る稲草も乾燥させるため、地面に広げていた。空気には、干している草の匂いと消毒液の匂いが混ざっている。

「三階から、荷物を運ぶのは大変じゃないですか。」と私はたずねると、ご主人は「いいえ、大丈夫よ、運ぶ通路も作ったから」言いながらと私たちをドアの向こう側に案内した。なるほど、ドアの向こうはちょうど隣の建物の屋根の上に繋がっていて、一本の階段で直接一階まで下りられるようになっている。さらに、階段のそばには、モノを運ぶためのすべり台のようなものも作られている。全て、養蚕のために考えられたものだと思えて実感した。

この階段から、一階の庭まで降りてくると、庭には10数羽の鴨などが走り回っていた。そして、庭の周りに、壁の代わりに、高くて古い桑の木は一列に並んでいる。夕日で、桑の葉はキラキラと光っていた。

そろそろ、お別れの時間だ。車は村の外の大道で待っていると聞いて、金さんは私たちを車まで送ることにした。先ほど、車で通ってきた細い道を歩きながら、両側の稲畑から、少し遠く離れているところにある桑畑が見えた。すると、金さんはこの辺、昔はとても広い桑園があった、しかし、周りの耕地が整備されたり、稲畑が変わったりして、今桑園はバラバラになってしまった。ただ1ムーの桑園でも、10何箇所で分散してしまうこともあると金さんが言った。そのとき、金さんの表情はとても心配そうになっていた。

車に乗る前に、金さんは自分の電話番号を教えてくれた。「また、ききたいことがあったら、いつでも電話していいよ」と金さんの黒い優しい顔はとても印象的だった。

私たちの車は大道に沿って、雲竜村から離れていた。そのとき、既に、暗くなって、来る時に両側に見えていた畑が見えなくなった。逆に、いつの間にか、高速

道路の両側に二列で綺麗に並んでいるランプが光っていた。

翌日の7月27日の朝、私たちは海塩鎮にある「中奇生物薬業」という製薬会社へと向った。

なぜこの製薬会社を見学するかというと、二つの理由がある。一つは海寧市糸綢公司が中奇薬業に大きく投資していること。もう一つは桑およびカイコの综合利用という点では、この製薬会社は全国でも、とても優れていることである。

車で約1時間走って、突然道路の下にある一面広げている桑園の中に入り込んだ。すると、余り広くない道の向こうに、石の柱に金色で「中奇生物薬業」と刻んである大きな門が見えていた。中には5,6階建てで、複雑な形状をした白い建物が一つしかない。中に入ると、真夏日なのに冷たい風が吹き、カイコの蛹の強烈な匂いを漂わせていた。

出迎えに来てくれたのは、副総経理の徐さんだった。徐さんは背が高く、とても元気な声で私たちに挨拶をした。ほかの糸綢公司や指導站で会ったリーダーたちと違って、徐さんは大体30代前半で、とても若々しく見えた。

徐さんの話によると、中奇薬業はカイコの蛹や桑の葉を利用して薬品を開発製造している会社である。桑の葉ははるか昔から漢方薬の一種になっていて、桑の葉で薬を作る技術は新しくないそうだ。中奇は単に、桑葉をお茶のように加工して、飲みやすくしているだけである。しかし、蛹を利用しているのは現在でも、全世界においても、とても珍しいそうだ。企業秘密により詳しくは分からなかったが、大体のことは教えてくれた。それは、ある種の菌を生きているカイコの蛹の体に殖入して、一定の条件下で、その菌を蛹の体に急速に成長させる。すると、発病した蛹の体から一種類の特別ウイルスが成長する。そのウイルスがまさに薬になる。

そのウイルスを含む薬は放射線治療を受けたガン患者にとって、白血球を正常値レベルにまで回復させる妙薬だそうだ。

この技術は、理論的には約10年前からすでに中国科学院教授によって開発されたそうだ。現在、この薬はまだ臨床実験段階だが、そろそろ製品化するそうだ。実は、この薬の理論的な技術を研究していたのは、まさに徐さんの恩師であった。中奇生物薬業を共に立ち上げたグループには、同じ恩師を持つ徐さんの先輩後輩が何人もいるという。

徐さんからとても難しい生物やウイルスの話を聞いた。でも、私はむしろ、原料となっているカイコの蛹の生産に興味津々だったので、少し詳しく訪ねてみた。

製薬工場生産に必要な大量の蛹は、すべて周辺の養蚕農民が飼育したものである。中奇製薬は養蚕

農民と直接に契約を結び、生産に必要な分量を品質の良い蛹で調達している。蛹原料を確保するために、養蚕農民からの繭買取価格の設定には、いろいろ工夫をしたという。

しかし、製薬に使う蛹の蚕は一般的に生糸を取るための蚕とは違った品種である。なぜなら、ウイルスを獲得するために、蛹の抗病能力を弱めなければ、人工で殖入した菌には感染し難くなるからである。これが原因で、製薬工場が使っている蚕の品種は実はとても弱く、自然界にある雑菌にも感染しやすく、飼育するのも大変になる。

徐さんと話したあと、薬生産の様子も見せてもらった。薬品生産工場の管理はとても厳しい。入るまでに、全身に白衣を着用して、専用の靴を履いて、そして耳までかぶる帽子に手袋も付けてから、ようやく生産現場に入れた。工場と言っても、実は生物実験室のようだ。でも、ほとんどの壁は硝子で出来ていて、廊下で歩くと全体の状況も把握できるようになっている。私たちが行ったときは、ちょうど 7 月生産分のウイルスの育成が終わり、原料蛹はもう薬粒になっていたところだった。なので、育成室や粉末室や混合と装填室の機械は動いてなかった。でも、徐さんは私たちに、菌を注入するための針板や、三軸で 360 度回転できる混合機、そして短時間でマイナス何十℃にまで凍結できる冷凍室などを詳しく説明してくれた。

最後に、包装室では、女性のパートさん 5、6 人が出来た薬を箱詰めにしていて、包装した薬を壁にある直径約 1m の穴から外に出していた。穴の向こうには大き

な冷凍トラックがまっている。外にいる工人たちは薬を詰めた箱をトラックに入れていた。トラックは薬を病院に直接送るそうだ。徐さんと私たちは部屋の中から、トラックを見送った。そして、徐さんの案内で、入ったときと同じところから生産場を出た。衛生管理のため、人の出入り口はそこだけになっている。

帰りには、徐さんと私たちは事務室に寄ってみた。事務室といっても、実は窓側にある 20 畳もない硝子の壁で区切っている部屋であり、机やパソコンや棚が幾つか並んでいるが、大きな部屋の大部分は白い陶器の流し台のある長い机で埋まっている。机の上には、数え切れない実験用の瓶や道具が並んでいる。その部屋で、常に品質を監察しているという。

ここで、工場の見学を終えた。徐さんは私たちを玄関まで見送ってくれた。車が再び入ったときの桑園を通り抜いた。曹主任の話によると、この桑園は昔 10 里（里は中国の距離単位である。1 キロは約 2 里。）も続いていた。しかし現在、養蚕農家は減りつつある状況で、桑園の中に点々と水田に改造されている箇所が多くなってきた。なぜなら、この地域では、養蚕よりも、食糧生産による収入のほうが安定しているからである。曹主任は糸綢公司以 30 年間も働いていた。しかし、カイコからはシルクしか取れないという昔からの考え方は変えなければならないと曹主任は思うようになっていたそうだ。

翌日の朝早く、私は曹主任と別れ、次の目的地の上海と向っていた。

(京都大学大学院経済学研究科)